

## 「わたしの友よ」

ヨハネによる福音書 15:11-17

3月は、卒業式の季節です。我が家の孫の中にも、高校を卒業する子がおります。卒業は親しい友との別れの時でもあります、しかしまた新しい人生の出発の時でもあります、新しい出会いの始まりでもあります。私が高校を卒業する時、友人たちとの別れを惜しんで、当時「プロマイド」と呼んでいましたが、自分の顔写真を親しい友と互いに交換し合うようなことをしたものです。今だったらスマホで自撮りをしたり、ツーショットで撮ったりするのですが、当時は写真屋で10枚単位で、安く撮ってくれて、それを交換し合うのがはやったのです。友との別れを惜しみ、互いにいつまでもつながっていたいという、思いによるものでした。

しかし、そのような一時の感傷的な思いは、長く続くものではありません。私は高校を卒業してすぐ郷里を出て、東京に出てきたこともあり、それまでの友人たちとのつながりは切れてしまい、友人との思い出は過去のものになってしまいました。

東京に出てきた当初、私は友人も知人もなく、大変孤独でした。「東京砂漠」などという言葉がありますが、都会の賑やかさの中で、一人取り残されたような寂しさを感じたのです。そういう中で、私は教会へと導かれ、良き師と出会い、教会の交わりの中に加えられ、そこで多くの信仰の友を与えられ、救われる思いがいたしました。何よりも、イエスさまが、私たちの「友」となってくくださった、ということに生きる喜びを見出すことができました。

今日のヨハネによる福音書 15章 14節でイエスさまはこう述べています。

**「わたしの命じることを行うならば、あなたがたはわたしの友である。もはや、わたしはあなたがたを僕とは呼ばない。僕は主人が何をしているか知らないからである。わたしはあなたがたを友と呼ぶ。」**

弟子たちにとって、イエスさまは師であり主でいます。本来なら主人と僕(奴隷)のような関係です。しかしイエスさまはここで、弟子たちを「友と呼ぶ」と言われたのです。主人と僕(奴隷)の関係はいわゆる「主従関係」縦(タテ)の関係です。しかし「友」とは、親しい横の関係です。僕(奴隷)は、ただ主人の言われた通りに服従するだけで、主人が何を意図しているのか分からず、また分かつてもしないのです。そこには人格的な信頼関係はありません。「奴隷根性」というような言葉がありますが、主体性がなく、ただ言われたから仕方なく従うという、ロボットのような生き方です。しかし、イエスさまはそのような関係を望みません。心と心が通じ合った信頼関係こそ、望ましい師弟関係だと言っているのです。

先ほど讃美歌 493番で、「慈しみ深い友なるイエスは」と歌いました。よく歌われるうたで、クリスチャンでない方でもよく知っている歌です。この歌が皆から好かれ親しまれ

るのは、曲が有名であるというだけではなくて、歌詞が「友なるイエス」が「憂いも罪をもぬぐいさられる」とか、「我らの弱さを共に負われる」と、「友」としていつも慰め支えて下さるという親しみやすい内容だからだと思います。しかしこの讚美歌を歌う時、心に留めておかなければならないのは、私たちがイエスさまを「友」と呼ぶことができるのは、イエスさまが私たちが「友よ」と呼んで受け入れ愛していてくださるからだ、ということです。本来「友」と呼ばれる資格のないような私たちが「友」として受け入れてくださることによって、わたしたちも主イエスを「友なるイエスよ」と呼ぶことが許されているということです。

イエスさまはここで「わたしが命じることを行うならば、あなたがたはわたしの友である」と言われました。この「わたしが命じること」とは、直接には12節で語られている「わたしの掟」のことです。つまり「わたしがあなたがたを愛したように、互いに愛し合いなさい」ということです。この言葉はこの17節でも、「互いに愛し合いなさい。これがわたしの命令である」という言葉で語られていますが、前に学んだ13章34節でも「新しい掟」として「わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互いに愛し合いなさい」と告げられていたことです。イエスさまは、そのことを具体的に示すために、弟子たちの足を洗われ、「主であり、師であるわたしがあなたがたの足を洗ったのだから、あなたがたも互いに足を洗い合いなさい」(13:14)と言われたのです。「友」というのは、本来そのような関係なのです。

この一連の言葉は、イエスさまが間近に迫った十字架の死を前にして語られた、イエスさまのいわば「遺言」のような言葉です。「遺言」とは死に逝くものが、最も信頼する者に託する最期の言葉です。イエスさまは弟子たちに「友よ」と呼びかけて、この遺言を託されたのです。それは、弟子たちが主イエスの十字架の愛をしっかりと受け止めて、互いに愛し合い、そのことによって、イエス・キリストの愛をこの世に証しするように、という主イエスの切なる願いであったのです。世にある教会は、そのような主イエスの委託を受けて、この世に立てられているのです。

13節でイエスさまは「友のために自分の命を捨てること、これ以上に大きな愛はない」と言われました。このイエスさまの言葉は、大変有名になった言葉です。私は小学生のころ日曜学校で「人その友のために己の命を捨つる。これより大いなる愛はなし」と文語体で暗唱させられました。作家の三浦綾子は、このみ言葉に基づいて「塩狩峠」という作品を書いたと言われます。この小説の主人公は、永野信夫というクリスチャンの鉄道員で、自分の結婚の結納のために旭川から婚約者のいる札幌に向かう途中、大変な事故に遭うのです。乗った列車が塩狩峠の頂上に差し掛かった時、客車が機関車から離れて逆走し始めたのです。彼は鉄道員として、すぐに手動のブレーキを操作するのですが、ブレーキが利かず、次第に坂道を下り始めたのです。乗客がパニック状態になっている中で、彼は「今なら間に合う」と、線路の前に身を投げ出して、自分の体で列車の逆走を食い止め、

命を犠牲にし、大惨事になることを防いだのです。これは明治の終わりに実際にあった出来事を基にして書かれた小説だそうですが、三浦綾子はその小説の中で、このイエスさまが語られた「友のために命を捨てること。これ以上大きな愛はない」というみ言葉を引用しているのです。この小説は映画にもなりましたが、当時それを観た私は、何度かその衝撃的な場面を思い返し、自分が主人公の立場だったら、どうしただろうか、と思わされました。おそらく自分だったら、列車から飛び降りても、線路の上ではなくて、安全なところに逃れたのではないかと自分の不信仰を嘆いたものです。

私たちは自分の力で、自分の命を捨てるほどに人を愛するということは、出来ません。しかしこの聖書の箇所をよく読み返してみると、イエスさまは、弟子たちに命を捨てよと命じておられるのではありません。「友のために命を捨てる」というその「友」とは、私たちのことであって、イエスさまが「友なる私たちのために」命を捨てるほどに愛しておられる、と言っておられるのです。そのような十字架の愛にまさる「大きな愛はない」というのです。そのような愛を受けている者として、あなたがたも、互いに愛し合いなさいと、語っておられるのです。

人を愛するという事は、言葉で言うことは簡単でも、生活の中で実際に行うということは、難しいことです。しかし、私たちの場合、イエスさまが私たちを「友」と呼び、実際にご自分の命をもって、私たちを贖い、私たちに命を与えて下さったのです。私たちは、そのイエスさまの愛に根差して、またその愛に押し出されて、互いに愛し合うということが、求められているのです。

「あなたがたを友と呼ぶ」と語られた主は、次の16節では、このように述べておられます。「あなたがたがわたしを選んだのではない。わたしがあなたがたを選んだ。あなたがたが出かけて行って実を結び、その実が残るようにと、また、わたしの名によって父に願うものは何でも与えられるようにと、わたしがあなたがたを任命したのである」。

弟子たちがイエスさまを選び、イエスさまの弟子となったのではないのです。イエスさまが弟子たちを選び、「友」として受け入れ、愛されて、彼らを使徒として任命されたのです。私たちはだれでも、どうしても自分を中心に物事を考えます。自分が愛し、自分が選び、自分が従ったのだと。しかし、信仰の世界では自分が中心ではなく、神さまが中心であり、イエスさまが主なのです。私たちが神さまを愛し、イエスさまを選び、教会を選んだのではなく、主なる神が私たちを愛し、選び、そしてこの教会へと招き導いて下さったのです。

このイエスさまの言葉で思い起こすのは、私が弘前の教会で牧会していた時のことです。弘前にはキリスト教主義の聖愛高校という女子の学校と東奥義塾という男子の学校がありました。その女子の高校に入学した女の子で、どうしてもその学校になじめず、学校生活を楽しめず悩んでいた子がいました。彼女は、本当は県立の受験校に行きたかったのですが、当然入れると思っていたのに、失敗して、滑り止めに受けたその学校に行く

ことになったのです。彼女は何もかもやる気を失い、学校に行くことが苦痛でした。そんなある日、学校の礼拝で、この「あなたがわたしを選んだのではなく、わたしがあなたを選んだ。行って実を結ぶためだ」という主イエスの言葉を聞いてハッとさせられたのです。そしてこの学校に導かれたことにも、見えない神の恵みがあるに違いないと思直して、学校での勉強や生徒会の仕事に身を入れるようになり、教会にも熱心に通うようになりました。やがて彼女は洗礼を受け、生徒会の会長なども引き受けるようになり、充実した高校生活を送り、社会福祉の道に進み、ある大きな教会の牧師夫人になり、現在とても良い働きをしておられます。神さまの選びの不思議さを思います。

神さまは、一人一人をお選びになり、「友よ」と呼びかけて、それぞれに相応しい道を備えてくださいます。イエスさまがお選びになった弟子たちのうち、イエスさまに失望し、イエスさまを裏切り離れて行った弟子もありました。イスカリオテのユダです。この最後の晩餐の直後にこの弟子は、外に出て行って、イエスを捕らえて殺そうと狙っていた祭司長・長老たちに密告して、やがてイエスを捕らえるために大勢の群衆を連れてやってきます。マタイによる福音書によると、このユダは「先生今晚は」（シャローム平安があるように）という挨拶をして接吻をしたということが書いてあります。その接吻を合図にして、イエスを捕らえる手筈になっていたのです。接吻という信頼と親しみを表わす行為をもって裏切るという行為によってイエスさまは捕らえられ、十字架にかけられることになるのですが、そのユダの接吻を受けたとき、イエスさまは彼に何と言ったでしょう。「友よ、しようとしていることをするがよい」（20:50）と言われたのです。

ここにイエスさまの「極みまでの愛」が示されているのです。ユダは残念ながら、そのような主イエスの愛を受けながら、頑なに自らの殻に閉じこもり、破滅への道をたどりました。イエスさまはどれほど心を痛められたかわかりません。

「友よ」。十字架と復活の主は今も、御手を広げてそのように私たちに呼びかけ、招いておられるのです。主イエスの愛にとどまり、主イエスの友として、互いに愛し合い、この世に主イエスの愛による平和をもたらす者でありたいと願います。         アーメン